

礼拝さいこう

誰と一緒に礼拝？ 賛美歌の言葉の再考から

賛美歌検討委員会では、特別委員会の皆様より「新生讃美歌アンケート」(2016)にご協力をいただき、第12回礼拝音楽研修会でのフォーラムや、『新生讃美歌ブックレット』を通して、課題を共有してきました。今号の「礼拝さいこう」ニュースレターでは、前号に引き続いて「誰と今礼拝するのか？」をテーマに、「礼拝」と「賛美歌のことば」の課題を切り口として、靖国神社問題特別委員会の委員よりご寄稿いただきました。それぞれの教会で、「誰と礼拝？」の対話が起こされていくことを願っています。

「負の歴史を繰り返さないために」

『こどもさんびか 改訂版』（日本キリスト教団出版局・2002年）の100番「せかいのこどもは」が、かつて「東亜の子供はお友だち…」と歌われていたことを知った時の衝撃は忘れられません。そんなこととはつゆ知らず、アジアの留学生と一緒に歌ったことがあったからです。

「東亜の子供」は、1944年3月刊行の『日曜学校讃美歌』の中に収められています。当時の教会が「大東亜戦争」または「大東亜共栄圏」をよ

靖国神社問題特別委員会 細井留美(東京北)

きものとして子どもたちに教育していたことがわかります。そのような賛美歌が、なぜ歌詞を変更して『こどもさんびか』に収められたのか、その経緯は知りませんが、よいメロディだからという理由で歌詞を変えて再利用するだけでは、いつか戦前と同じような時代がやって来た時に、いとも簡単に前と同じような歌詞に変えられてしまうと思います。かつて、「東亜の子供はお友だち…」と歌われていたことを、明

Index

1-2	誰と一緒に礼拝？	靖国問題特別委員会 細井留美 (東京北)
2	日本賛美歌学会第13回大会に参加して	長谷川ふみか (相模中央)
3-9	第13回礼拝音楽研修会報告	教会音楽専門委員 藤井秀一、踊真一郎。江原美歌子
10	新生讃美歌ブックレットを用いた研修会報告	鈴木幸子 (上尾)
11	連合の取り組みから、北九州連合	美登恭子 (高須)
12	『新生讃美歌ブックレット』を使用して	太内田めぐみ (所沢)、ほか

示して継承する方が、戦争に加担した教会の歴史を学ぶことになり、同じ間違いを繰り返さないために必要なことではないでしょうか。

また、私は長い間、賛美歌に出てくる「みいつ（御稜威）」を、「みつつ」（＝三位一体）のことだと思い込んでいました。だから、それが「御稜威」という天皇の威光を表す言葉であることを知った時にも、やはり衝撃を受けました。知らないこと、知ろうとしないことは、恐ろしいことだと思います。

戦前の教会は、天皇制に敵対する宗教ではないことを誇示するため、賛美歌集に「君が代」を収めたり、天皇制用語を賛美歌に用いてきたりしてきました。このことによって、信徒にどれだけ大きな影響を与えてきたのでしょうか。教会は、戦闘機の献納などにより積極的に戦争に協力するだ

けでなく、神社参拝を宗教ではなく儀礼だとして、「神のみを神とする」という大切な戒めから大きく外れてきました。敗戦後もそのことがすぐに清算されたわけではありません。それゆえに、天皇制用語が賛美歌に残ってきたのでしょう。

7月に発行された『新生讃美歌ブックレット』では、賛美歌の「ことば」を検証する取り組みの必要が記され、「用語解説」においては天皇制用語と指摘されている言葉が明らかにされ、歌い替えの提案も行われています。人間は同じ過ちを繰り返します。それだからこそ、過去に学ばなければなりませんし、そのことを次の世代に伝えていかなければならないと思います。

『新生讃美歌ブックレット』の発行が、その役割を担い、多くの方々に天皇制と教会との過去の歴史を知るきっかけとなることを願っています。

日本賛美歌学会第13回大会に出席して

日本賛美歌学会では、3年に一度海外から講師を招き、世界の賛美歌の動向や取り組みを学んでいます。今回は、『新生讃美歌』344番「来ませ来ませ」の作者であるイ・コニョン氏を講師として韓国からお迎えし、一日の講演と賛美プログラムが豊かに導かれました。

長谷川ふみか（相模中央）

2018年9月8日、日本賛美歌学会第13回大会は、イ・コニョン先生の自国韓国の伝統音楽を用いた賛美歌作りへの熱意に溢れるものでした。先生は、ご自身が作曲された賛美歌について、それらがどのようにして実際に会衆に歌われてきたか、または歌われてこなかったかを分析し、その理由を明らかにし、赤裸々に発表されました。作曲家としての一方的な思いに固執せず、会衆と互いに心合わせて賛美を捧げることに心を砕き、霊の働きに委ねる謙遜さをお持ちであることに感銘を受けました。「賛美歌の土着化が終着駅ではない」との先生のお言葉からは、作曲家としての思いを超え、礼拝者として神様に献身なさるお姿がはっきり浮かび上がっていました。大会の後半では、先生の作曲されたたくさんの賛美歌を皆で歌い、韓国独特の曲調で同じ主を賛美する喜びを味わい、主の大いなるみ業を崇めました。

会場である立教大学礼拝堂、そこで与った聖公会の礼拝により、私の救われた米国の聖公会教会や礼拝を懐かしく思い出しました。整えられた礼拝にて、礼拝と賛美を豊かに経験することができ感謝でした。プログラム全般で、若々しい立教大学の学生がチームとなってオルガンの奏楽や、礼拝司式、聖書朗読、ロウソクの点火消火などを任され、大会の中で彼らの紹介もあり、青年の働きが大切にされている様子が伺えました。

雄々しく新しい歌を捧げる業に仕えるコニョン先生に大変励まされたとともに、日本の伝統芸能や古くから馴染まれている日本的旋律を用いた賛美の可能性に思いを馳せました。

第13回礼拝音楽研修会 in 函館

今年2月の旭川での研修会を経て、5/12～13には、今回は道南地区の函館を中心にして「第13回礼拝音楽研修会 in 函館」を開催しました。「地域密着型」の研修の在り方を求めて、地域の要望や課題を受けながら研修会の内容が検討され、12日に分科会、13日には教会に分かれての主日礼拝と午後の合同研修会のプログラムが立てられました。研修会ではさまざまな気づきと励ましをいただき、大いに祝された2日間となりました。（出席人数 12日25名、13日23名、参加教会 9教会。）

1日目 5月12日(土) プログラム

研修会場：函館キリスト教会

13：00～ 開会礼拝

13：20～ 分科会

①奏楽 担当：森洋子（函館美原）

②聖歌隊 担当：江原美歌子

③ユース・バンド 担当：踊真一郎（久留米）

藤井秀一（花小金井）

15：30～16：00 分かち合い 終了



開会礼拝 メッセージ

踊 真一郎 教会音楽専門委員

「礼拝」について考える研修会の礼拝の初めに、キリスト教会の誕生の記事を読んでいただきました。使徒言行録2章に記されている、復活のイエス様が約束された聖霊が弟子たちに降り、キリスト教会が誕生した出来事、「ペンテコステ」の物語です。

「五旬祭の日（ユダヤ教の収穫祭）が来て、一同が一つに集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上に留まった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した。」

1節には聖霊が降る前に「一同が一つに集まっていると」とあります。礼拝に関する本を多数出版されている神学者、越川弘英氏は、この描写は「礼拝の光景」を表わしていると言及しています。弟子たちは一つの家に集まり、皆で祈り、皆でイエス様の言われた言葉を思い起こし、励まし合っていたその「礼拝」の場に聖霊が降り、教会が生まれた、と聖書は語っているのです。

「はじめに礼拝があって教会は生まれた」と、聖書は私たちに伝えます。教会があって、皆が集まってきて、「じゃあひとつ礼拝でもしてみるか」ではなく、礼拝が先にあり、そして教会が生まれたというのです。祈りがあり、賛美があり、み言葉が分かち合われ、交わりを喜び、共に神さまに応答しようと決意されていく中で、教会が生まれていったのです。この箇所は私たちに「教会のはじまりは礼拝から、礼拝こそ教会の命の源であり、礼拝が原点」だと告げています。

研修会を通して礼拝の豊かさと素晴らしさに出会い、そして教会の中で分かち合っていたら幸いです。ご一緒にワクワクして研修会を始めていきましょう。

第13回礼拝音楽研修会 in 函館

分科会の感想から

奏楽

- ・少人数だったこともあって、リラックスして楽しみながら、「選曲について」や「緊張すること」など、それぞれの抱えている課題などを分かち合えたのがとてもよかったです。この研修に参加して学んだことを教会に持ち帰って、今後のご奉仕のために、そして礼拝がさらに豊かにされるように、「奏楽者ではない兄弟姉妹たち」とも共有したり考えたりしていきたいと思います。（Mさん・平岸）
- ・教会では「自分でちゃんと歌っている？」等と、呼吸やテンポで課題をいただき、どうしたら会衆に仕える奏楽になるかと悩んでいたところで、たくさんのアドバイスをいただきました。奏楽に限らず緊張するので、少しずつがんばります。（Sさん・山形）
- ・この地域密着型研修会では準備する側でしたが、すっかり参加者のモードになって、互いの課題に聞きあうことができ、またアドバイスすることができました。（担当 森洋子・函館美原・教会音楽専門委員）

聖歌隊

- ・もっとこのような研修会を必要としている教会や地域があると知り、学んだことをいっぱい広めたいと思いました。（Sさん・函館）
- ・言葉の意味をよく理解し、練習し、心を合わせて、神様に向かって賛美をささげることの大切さ、改めて知ることができ、ありがとうございます。（Yさん・室蘭）
- ・発声法を学びました。ちょっとした工夫で楽に声を出せるようになり、そのことで歌詞を味わいながら賛美できることを知りました。（Yさん・室蘭）
- ・いつもよりもののびと力まずに声を出す呼吸、発声を体験しました。（Sさん・函館）
- ・日本語で歌う歌い方から学ばせていただきました。礼拝で賛美することが豊かにされたように思います。（Fさん・函館美原）
- ・分科会で聖歌隊に参加させていただきました。“おいおい発声法”がとても分かりやすく、腹式呼吸を習得するのにとても良いと思いました。函館教会でも、聖歌隊の練習の時に取り入れさせていただきたいと思いました。（Hさん・函館）
- ・江原式「おいおい発声法」で、“ことば”を意識することを改めて教えられました。（Yさん・函館美原）



ユース・バンド



- ・主に、函館教会の青少年のメンバーが参加しての分科会となりました。礼拝での賛美の伴奏を「少年少女バンド」がリードをするようになって、礼拝奉仕の一部として認知され、用いられるようになってきましたが、なかなか賛美の奉仕の意味を深く学びあう機会がありませんでした。今回の2人の教会音楽専門委員による、さまざまな投げかけは刺激となったようです。翌日の函館教会での賛美リードや閉会礼拝での「いつもよろこんでいなさい」（『新生讃美歌』446番）は、その学びあいを経ての奏楽となり、豊かな賛美となりました。
- ・奏楽やリードをする私たちだけが盛り上がるだけでは、本当の賛美ではないということを学びました。自分の周りと同じ気持ちに合わせてみんなで賛美したいと思いました。（Hさん・函館）

研修会2日目 5月13日 午前 教会訪問

教会音楽専門委員と室長とで分かれて、3教会の主日礼拝に出席する恵みをいただきました。

函館キリスト教会 主日礼拝に出席して

教会音楽専門委員 藤井秀一（花小金井）

研修会の二日目の朝、わたしは研修会の会場でもあった函館キリスト教会にて主日礼拝を捧げました。礼拝の中では、一曲、少年少女のバンドが賛美のリードをしてくださいました。前日の研修会のバンドの分団で学んだ「会衆と共に」「会衆に仕える」バンドのあり方を感じさせてくれる少年少女たちのリードのもとで、高齢の方も楽しく一緒に賛美を捧げる姿が印象的でした。献金の時には少年少女によるバイオリンが響き、心が豊かにされました。若い人たちは部活や行事などで、毎週礼拝に参加できないこともあることなのでしょうが、礼拝における彼らの奉仕の場を大切に守っておられる温かな教会の姿勢と礼拝の雰囲気を感じさせられ、チャレンジを受けた思いがしました。

函館美原キリスト教会、主日礼拝に参加して

江原美歌子

主日礼拝は、函館美原教会に出席しました。仕事の関係でフィリピンから来られているメンバーが教会に加えられてから、教会の体制は、英語で対応できるように細部にわたって配慮されていて、ひとつひとつの丁寧な働きに感動を覚えました。礼拝前10時からの教会学校では、前もって発題者は教師達と聖書研究して臨み、英語のレジュメを用意しリードされました。発題後の分かちあいでは、フィリピンの方々もグループに分散し、英語が苦手な方々も、英語で伝える努力をされていました。言葉の壁を越えて、福音を分かち合いたいという願いが私の中でも起こされていきました。また、礼拝においても週報はすべて日本語と英語で記載されており、説教では、パ



ワーポイントでメッセージの訳が準備され、共に礼拝するために、多くの祈りと奉仕者による献身的な働きがあったことを、覚えることができました。礼拝後にはフィリピンの方のバプテスマ準備があり、教会の喜びとなっていた様子が印象的でした。「誰と礼拝するのか？」の今回の研修会での投げかけと教会音楽の今後の取り組みに、大きな示唆とチャレンジをいただきました。

苫小牧バプテスト・キリスト教会を訪問して

教会音楽専門委員 踊 真一郎（久留米）

一日目、函館教会での研修後、二日目の主日礼拝奉仕のため、スーパー北斗に揺られ一路、苫小牧へ。苫小牧教会は新会堂の建築中のため、礼拝は私立高校のご厚意により、敷地内のレストハウスを借りて守っておられました。苫小牧教会の皆さまは新会堂建築をワクワクして待っておられると同時に、新会堂で、これからどうやって、さらに地域に福音宣教を展開されるか、考えておられました。礼拝後の研修会では20ほどの教会の礼拝プログラムを比較させていただきました。バプテスト教会の礼拝プログラムは、説教の取り組み方、子どもメッセージや公禱の有無、会衆賛美の数、報告時間の位置や行い方から、週報の作りなど教会毎に千差万別です。この違いは、それぞれの教会の宣教論の違いから出てきています。今、自分たちは誰と共に礼拝を守っているのか、誰を礼拝に招きたいと願っているか、どう神さまと向き合い、どう応答するか、そんな取り組みの違いが各プログラムを作っています。研修会ではそんな違いを分かち合わせていただきました。研修が、新会堂と共に始まる新しい苫小牧伝道のヒントになればと祈っています。

第13回礼拝音楽研修会 講演アウトラインから

2日目 5月13日(日) 午後 講演「私たちの賛美って？」

江原美歌子

『新生讃美歌』を通してはじまった私たちの「礼拝」と「賛美」の学びあいは今回で13回目となります。講演では賛美歌のそれぞれの賜物に焦点をあて特徴を学び、賛美歌を礼拝にふさわしく用いていくために、その働きを聖書から、歴史からひも解いていきました。『新生讃美歌ブックレット』の内容に重なる部分は、参照頁を記載しています。下線の賛美歌は、各特徴の中から代表的なものを講演内で歌ったものです。

I. 礼拝とは啓示と応答の対話である。 (『新生讃美歌ブックレット』P15 参照)

- ・啓示と応答の原型 出エジプト15章
- ・主のご命令としての賛美 II 歴代誌29：20-31
- ・礼拝の中での啓示と応答
啓示【詔詞、聖書、聖書朗読、説教、祝福、主の祈り】
応答【祈り、賛美、献金、奉献、信仰告白】
- ・礼拝の中の対話の矢印

II 礼拝の中の「対話」

- 1) シナゴグの礼拝経験を通して
- 2) 「主を賛美するために民は創造された」(詩篇102：19)の書かれた背景
- 3) イエスがサマリヤの女との対話から示された「まことの礼拝」とは
- 4) 礼拝の中でハプニングが起る！
- 5) 「神のもとにある交わり」～パウロの「賛美」についての言及から
エフェソ5：18、コロサイ3：16

III. 私たちの賛美って？ それぞれの「賛美歌の賜物」から学ぼう

*礼拝賛美の歴史を振り返りながら、作られた時代背景や神学、宣教課題や求めに応じて賛美歌創作されていったことを抑えつつ、特徴をみていきました。

1) 賛美歌のはじまり——ルターのはじめた会衆歌、コラール

新生讃美歌144「今こそ主よわれ安らかに」 シメオンの賛歌

新生讃美歌156「いざ来たりませ」 ラテン語賛美歌の訳

新生讃美歌238「主死にたまえり」 賛歌「復活の主は」の改訂

新生讃美歌474「深き悩みより」 詩編130篇をパラフレーズ

新生讃美歌538「神はわがやぐら」 詩編46篇をパラフレーズ

新生讃美歌182「天より降りて」 子どものためにつくった

【賜物】会衆が歌えるように賛美歌を母語(ドイツ語)にし、また、教義や詩編を会衆が歌っていくことで、「神のことば」を浸透させていった。会衆の礼拝の参与が促された。

2) 創作賛美歌のはじまり——アイザック・ウォッツ

*それまで主流だった「詩編歌」から、あらたに創作賛美歌の取り組みがはじまり、プロテスタント教会の賛美が広がりを見せていきました。

『賛美歌と霊の歌』(1709)

『新約聖書の用語法で模倣したダビデの詩編』(1719)

新生讃美歌106「主はわが牧主」 詩編23 パラフレーズ

新生讃美歌572「神わが助けぞ」 詩編90 パラフレーズ

新生讃美歌224、225「主イエスは尊き」

新生讃美歌235「栄えの主イエスの」

新生讃美歌291「主イエスの支配は」

【賜物】自分のことばでキリストを証しし、賛美を通して信仰告白を表わす。

3) 救いと福音の喜びを歌う——福音唱歌（『新生讃美歌ブックレット』P8 参照）

＊米国の天幕集会「キャンプ・ミーティング」の流れをくみ、「罪の悔い改め」と「キリストの救い」等の賛美歌が19世紀前半に創作され、19世紀後半には「福音唱歌」として、キリストの救い等、福音を歌う賛美歌（集）が出版され、日本への伝道とともに、多くの曲が日本でも紹介され愛唱されていきました。

新生讃美歌431「いつくしみ深き」スクライブン/コンバース

新生讃美歌544「ああ嬉しわが身も」クロスビー/ナップ

新生讃美歌523「主われを愛す」ワーナー/ブラッドベリー（日曜学校賛美歌）

新生讃美歌134「いのちのみことば」ブリス

新生讃美歌59「主のまことはくしきかな」チズム

新生讃美歌550「ひとたびは死にし身も」ホイットル/ムーディー

【賜物】救いの喜び、伝道の歌、証しの歌を歌う。わかりやすい言葉、歌いやすい旋律。

4) プレイズ&ワーシップ（『新生讃美歌ブックレット』P67 参照）

新生讃美歌466「救い主はそばに立ち」ラルフ・カーマイケル

新生讃美歌493「み子イエス世人のため」ゲイサー

新生讃美歌537「重い荷をにない」ゲイサー

新生讃美歌10「主のみ名により」

新生讃美歌11「たたえよたたえよ」

新生讃美歌33「輝け主の栄光」

新生讃美歌35「主を賛美しよう」

新生讃美歌47「愛するわたしの主」

新生讃美歌80「父の神 われらたたえる」

新生讃美歌233「主はそのいのち」

新生讃美歌293「神の国と神の義を」

新生讃美歌644「父をあがめます」

【賜物】テーマは「賛美」や「礼拝」が強調される。日常性のあるもの、リズムによるメリハリや、礼拝楽器の多様性を歓迎。繰り返しによる歌唱。霊的な導きを重んじる。

5) 現代の賛美歌（『新生讃美歌ブックレット』P68 参照）

新生讃美歌251「恐れをすてさり」パブロ・ソーサ

新生讃美歌342「教会世にあり」フレッド・プラット・グリーン

新生讃美歌591「愛する二人に」ブライアン・レン

【賜物】現代の宣教課題の求めに応じて作られ、賛美歌の「ことば」に関しても、神学やその中身について吟味され、あらたに賛美歌に相応しい「ことば」が紡がれている。

講演のⅣではアウトラインⅢの「賛美歌の賜物」を抑えつつ、賛美歌を礼拝の中でどのようにふさわしく用いていくかを学びました。「投げかけ」の部分を中心にご紹介します。

Ⅳ. 教会の中で、礼拝の中で ふさわしく賛美歌を用いるために

1) 礼拝の流れを知って（対話）

礼拝が対話で作られていることを学び、賛美歌がその対話のために、神と人、人と人をつなぐ働きとして用いられていることを改めて覚えることができました。賛美歌の言葉の「中身」が何を指ししめしているかに、より意識をもっていきたいと願われます。また、好きだから歌うのではなく、嫌いな食べ物であっても栄養として必要なものはいただくように、賛美歌を総合的に理解し、私たちの信仰生活や、神との対話の中で必要とされている賛美歌を求めていきたいです。

2) 教会を知って（歴史、ビジョン、信仰告白、課題）

皆様の教会では、どのような歴史があり、どのような宣教のビジョンがあるのでしょうか。例えば、私の属する相模中央教会では、今年度の年間テーマは「共に福音に与るために」が掲げられ、礼拝の毎週歌うテーマ賛美歌に、連盟の諸集会で歌われた「共に」（友納聖子作詞作曲）を歌っています。毎週の礼拝で「共に」を覚えあうために、賛美歌が用いられ、祈りが導かれています。また、ある教会では「一致」をテーマに掲げた際に、『新生讃美歌』363番「キリスト教会の主よ」が賛美として用いられたそうです。教会の総会、役員会や信徒会等での語り合いを通して教会のビジョンを確認しつつ、今教会に必要な賛美とは何か？賛美の「ことば」とは何か？を常に意識して、賛美歌を選び取っていききたいものです。

3) 会衆を知って（子どもから高齢者まで、「音」楽の嗜好）

会衆賛美にはどのような方々が参与されていますか？「子どもと共なる礼拝」を掲げる教会では、難解な賛美歌のことばへの配慮があり、また、若い方たちの礼拝奏楽奉仕を大切にする教会では、バンドやギターなどの伴奏をとり入れるところもあるでしょう。また、高齢者の方々と共に礼拝することを意識する教会では、伝統の賛美歌、慣れ親しんできた賛美歌を中心に賛美歌が選曲され、また音量への配慮などもあることと思います。障がいのある方がおられる場合、さまざまな配慮があることでしょう。このように会衆1人1人を覚えることは、私たちが「誰と賛美するのか」を大切にすることであり、互いを認め受け入れあいつつ捧げる賛美を、主は大いに祝福してくださいます。

一方で「音」や「音量」については、生理的に受けつけないことがあるかもしれません。また、そのような違いをもった会衆と礼拝賛美しているということを常に意識していなければなりません。楽器の使用や導入に関しては、教会の様々なところで意見を共有しつつ、全会衆が抵抗なく、礼拝に参加できる道を模索する必要があるでしょう。

4) 新来者を覚えて

慣れ親しんだ文語体の賛美歌の言葉が、分かりやすい口語体の言葉で訳しなおされているものが多々あり、それに対しては、多くの方々が抵抗を感じておられるようです。しかし一方で、新来者にとっては、すべての賛美歌が新しい出会いであり、言葉はむしろ、分かりやすくストレートに心に響く言葉であることが望まれているのではないかと思います。また賛美歌で、教会が神の聖

域にたつて外にある「世」（人々）に向かって歌う内容を歌うとき、新来者は「世」（人々）を、どのように受け取られるのでしょうか（『新生讃美歌ブックレット』P16参照）。讃美歌の言葉の中から表わされる隣人性、私たちがどの立ち位置で讃美をしているのかを意識して選曲し、歌いたいものです。

5) 讃美歌の賜物を知って

Ⅲで讃美歌にはそれぞれ賜物があることを学びました。プロテスタントの教会では、聖書に向かい合う中で神学が導かれ、また宣教課題の求めに応じて讃美歌が創作され、礼拝で用いられてきました。それでは、どのような讃美歌を「今」、私たちの礼拝で歌っていくのでしょうか？

讃美歌の「ことば」を意識して歌うことによって、「信仰告白」、「証しの歌」、「救いの喜びの歌」、「苦難からの叫び」など具体的にメッセージが響いてくることでしょう。それらの讃美歌を、礼拝の流れの中でふさわしく用いていくことは、礼拝の「ドラマ」（『新生讃美歌ブックレット』P21 参照）を立て上げることを助けます。礼拝の中の対話を豊かにするために、また、礼拝でふさわしく讃美歌を用いていくための学びを始めていきませんか？

・・・最後に

教会音楽室では「私たちの讃美って？」という投げかけを通して、様々な対話に与っています。讃美歌検討委員会では、讃美歌の「ことば」の吟味を続けており、特別委員会にはアンケート等で協力をいただき、様々な場で課題を共有してきました。靖国神社問題特別委員会からは、「みいつ（御稜威）」が天皇制特定用語であったことを知らないで歌っていることの様々な課題や、また、部落問題特別委員会からの讃美歌の言葉の指摘では、「『汚れ』の『け』という言葉を知りただけでも身震いをされている」方々の存在が示され、これらを受けて、讃美歌検討委員会では歌い替えの言葉の検討が始まっています。また、若い世代から「歌っていても意味がわからない」との声を受けたことがきっかけとなり、『新生讃美歌ブックレット』では「用語解説」を掲載しました。どれも、私たちの讃美って？の投げかけから起こされた取り組みです。

この他にも、今必要とされている讃美歌の言葉を求めたり、宣教に相応しい讃美歌が見つからず、何時間もかけて讃美歌を選ぶこと、また、新たに生まれる讃美歌を学んでいくことも、どれも「私たちの讃美って？」を求めていく取り組みです。「新しい歌を主に向かって歌え」の、「新しい」とは、みことばを受けて私たちの信仰告白が日々「新たに」されていくことであり、讃美歌もこのために用いられているのではないのでしょうか。

これらの課題を分かち合いながら、今の時代にあって常に新しいメッセージをみことばから受けつつ、「私たちの讃美って？」の対話に与り、讃美していきたいと願われます。この讃美歌をめぐる対話がさらに広がっていくこと願っています。この歩みは、神様への霊とまことをもつての礼拝に求められている「心からの讃美」、対話と交わりの中から起こされる豊かな讃美につながっていくことと期待しています。



第13回礼拝音楽研修会 in 函館 参加者の声から・・・

現在奏楽者2名のため（この状態が10年以上続いています）、「新たに何かをしよう」ということが起こりにくく、現状を維持するだけで精いっぱいでした。「奏楽」の奉仕はなかなか「同志」を見つけにくいと個人的に感じています。情報の共有や各々の課題についての分かち合い等がこれからもできるようになるとありがたいと思っています。「奏楽者にしかわからないこと」もあると思うので、何かしらのつながりが今後も続くことを願っています。（平岸・三浦さん）＊「礼拝さいこう」をいつも楽しみにしてくださっているそうです！

新生讃美歌ブックレットを用いた研修会

北関東連合音楽研修会の恵み

鈴木 幸子（上尾）



7月28日(土) 水戸教会で、「よりよい礼拝音楽を求めて」「新生讃美歌ブックレット活用法」というテーマで、江原美歌子先生を講師として研修会が行われました。上尾教会からは9人で出席し、あいにくの大型台風の影響のため出席見合わせの教会もあったり、プログラムの時間が少し短縮されて行われましたが、60名と多くの参加者が与えられ、祝された会となりました。

丁度この日に発行されたばかりの『新生讃美歌ブックレット』中心の講演が午前であり、午後には「だれでも聖歌隊」と、分かりやすい歌い方の実技研修がありました。特に、賛美の言葉がブツブツ切れないように、音の流れをドレミの音階を工夫したシートを使いながら特訓してくださいました。そしてそこで練習した混声聖歌隊の賛美を、最後の派遣礼拝の会衆賛美の中で捧げました。

『新生讃美歌』は2003年に、10年をかけて「礼拝」を柱に加えた682曲を収録し発行されました。15年使っていく中で、よりよく礼拝音楽を捧げていくために、今回発行された『新生讃美歌ブックレット』が必要であったのです。

なにげなく歌ったり、コンサートや色々な形態で賛美しますが、やはり、礼拝の中で神さまのみ言葉を聴き、それに応答する会衆の心を一つにした賛美を捧げる時に、最も多く賛美歌が用いられています。しかし、歴史を振り返ると会衆賛美は367年にラオデキア教会会議で禁止され、以後1150年間、司祭や聖歌隊の働きに限定されていました。その後マルチン・ルターの宗教改革の時にあって、ドイツ語に聖書翻訳がなされ、会衆は理解をもって「礼拝」に参加し、会衆賛美も創作されていきました。500年前のことです。

「『信仰』の言葉を『音楽』に乗せて歌うことにより、私たちの『知性』と『情緒』は結び合わされ、より全人格的な『信仰』の応答へと導かれていきます。また1つの『音楽』に乗せて1つの『信仰』の言葉を歌うことにより、主に招かれた者たちの心は1つにされていきます。『信仰』の言葉は『音楽』と結びつけられることでより深く個々人と共同体の中に『記憶』として定着していきます（『新生讃美歌ブックレット』19頁）」。「音楽」に乗せて賛美できる幸いを感じます。また手話賛美では、全身指先まで、柔軟に表現でき、心の深さを表現できることに幸いを感じます。「信仰」の言葉は、声でも指先でも同様に表現されると感じています。

今回特にミーター（韻律）について（『新生讃美歌ブックレット』41頁）理解できたことは収穫でした。『新生讃美歌』の各頁の楽譜の右下の数字がそれです。ミーターとは、寸法、大きさのことだそうです。例えば、「いつくしみふかき(8文字) ともなるイエスは(7) つみとがうれいを(8) とりさしたもう(7)」のミーターは楽譜の右下に**87 87**となり、他の賛美歌で同じミーターなら、知らない曲の賛美歌の歌詞でも、知っている曲に合わせて歌えるということです。

また、意味の難解な言葉の解説もブックレット後半に辞書のようにありますし、『新生讃美歌』で使われている言葉に問題を感じる場合は、「賛美歌検討委員会」で検討されながら、よりよい賛美歌を検討され、次に賛美歌編纂される時には生かされていくそうです。感謝です。

「大会衆の中での私の賛美はあなたから出たものです。」詩篇22：25（新改訳）

『教会おじゃまします音楽版』

北九州地方連合 教会音楽委員長 美登 恭子（高須）

10月13日（土）直方教会で「教会おじゃまします音楽版」が行われました。

北九州地方連合伝道委員会の、連合内の方々が各教会を訪問する「教会おじゃまします」という働きも2巡目となりました。今年度は教会音楽委員会でも初の試みとして「教会おじゃまします音楽版」を計画しました。これまでは、研修会や賛美集会、連合聖歌隊での賛美奉仕等、委員会が企画して参加していただく集会でしたが、各教会の賛美のニーズは様々で、それにどう応えていくかを検討し、各教会からリクエストをいただき、そのニーズに応える形で教会音楽委員会が出前集会をすることになりました。



今回、手を挙げて下さった直方教会は遠賀川沿いにある教会で、遠賀川地域には連合内の教会が8つあります。既に遠賀川沿いの教会では定期的な牧師の集まりが行われており、その教会の方々が一堂に会したこともあります。そんな協力関係が出来つつある遠賀川地域の教会にお声掛けをする事で、賛美でも連合内の協力関係が出来るのではと考えました。

直方教会のリクエストは、あまり知られていないクリスマスの賛美歌の紹介と、ハンドチャイムによる賛美の体験でした。直方教会には、既に2オクターブのハンドチャイムがあり、歌詞による楽譜での練習もされていますので、今回は、他教会や音楽委員が個人で持っているハンドチャイムを4セット準備し、遠賀川地域の教会が大勢でハンドチャイムを使って賛美できることを思い描きながら、期待して準備していきました。

実際には、6教会13名の方々と、クリスマスの賛美歌を共に賛美し、その後ハンドチャイムの体験をしていただき、1時間半ほどの楽しい時間を過ごしました。練習した賛美歌は今年のクリスマスに使われるかもしれません！ハンドチャイムでは2つのグループができ、音符ではなく「歌詞による楽譜」（右下写真）で、まずは「上を向いて歩こう」に挑戦しました。最初は尻込みされていた方も一緒にやってみると、1回でメロディがはっきりわかったのには皆が驚き、益々前向きになり、本当に楽しんで演奏されていました。その後は「栄えの主イエスの」も同様に「歌詞による楽譜」で練習し、駆け足で盛りだくさんの内容でしたが、短時間で形になる「歌詞による楽譜」に、賛美は音符によるものだけではないことを実感されたことと思います。

連合の集会等で遠賀川地域の方々がハンドチャイムを使っているの賛美が捧げられ、協力関係が密になっていくことを願いつつ、初の試みは感謝な時となりました。



『新生讃美歌ブックレット』を用いた研修会開催のオススメ

7月には北関東連合との共催により、第1回目の『新生讃美歌ブックレット』を用いた研修会が開催され、参加者がブックレットを手にしなが、一つ一つを学ぶことができました。また歌い方の工夫では、実際に歌いながら、楽しい時間を過ごすことができました。11月3日は東北連合との共催で鮫教会を会場に研修会が開催され、また来年2月8日には神奈川連合との共催で、相模中央教会で同内容の研修会が計画されています。宣教部教会音楽室では、このために研修会開催補助費をあてて支援しています。連合単位だけでなく、2つ3つの教会が集まって、研修会を開催することもできます。詳しい内容は、教会音楽室までお問い合わせください。

『新生讃美歌ブックレット』を使用して

『新生讃美歌ブックレット』を7月末に1000部発行し、10月末で残り300部を切り、好評のうちに用いられています。価格も広く信徒の皆様にご購入、活用していただきたく、500円と安価で提供しています。また、2012年に発行した『新生讃美歌ハンドブック』とセットで購入される場合、通常1,500円のところを、1,200円で購入することができます。この機会にどうぞ、お求めください。

以下、『新生讃美歌ブックレット』をご購入いただいたかたから感想をいただきました。

『新生讃美歌ブックレット』に感謝

太内田めぐみ（所沢）

私たちには母語があります。疑う事なくこの母語で語らい、歌う事ができます。そして、母語つまり日本語で心からの賛美をお捧げします。それは本当に喜びに満ち、嬉しく、幸せな時となります。

母語が手話の方々がおられます。ろう者の方々です。聴く事、話す事にハンディがあります。ろう者の方々も手話で礼拝をお捧げします。「見る言葉」というものをどれくらいの方がご存知でしょうか。そしてその言葉のすばらしさ、美しさを感じ取られているでしょうか？

私にはろう者の方々と一緒に賛美をお捧げしたい、神様のお話をしたいという思いがあります。手話が母語ではない私にとっては大変困難なことです。特に日本語は語彙が多く、意味の深い言葉が沢山あります。それを限られた手話に置き換える必要があるのです。賛美歌の歌詞一つとっても、現在形、過去形、未来形、そして進行形(?)とわからないことが幾度となくあります。そして、意味がよく解らない歌詞に頭を悩ませるのです。もちろん、辞書を引いて、歌詞に合わせて考えてみますが、しっくりいかない時も多々あります。賛美歌の歌詞の時代背景によって表現の内容が難しかったり、文語が多かったり、日常会話では使わない言葉(歌詞)がたくさん出てくるのです。

そのような状況の中で『新生讃美歌ブックレット』を手にする機会が与えられました。賛美歌や賛美することについて多方向から見つめているブックレットですが、なんといっても「用語解説」に感謝しています。まだ学びは続きますが、解説をひも解く度に、もっと、もっと賛美歌を知りたい、賛美歌を学びたいと願いが起こされます。また、機会がありましたら、手話で賛美歌を歌い捧げる体験をされたり、手話で共に主をほめたたえることについて考えてくださったり、奉仕してくださる方があれば幸いです。

クリスマスのご準備、お問い合わせは教会音楽室まで

聖歌隊楽譜（礼拝式・プログラムにあわせた選曲）、曲の背景、原歌詞のお尋ね等、お気軽にお問い合せください。聖歌隊楽譜は連盟ホームページ掲載の注文用紙で注文できます。Tel. 048-883-1091